事業所訪問

こんにちは健保組合です！

和光商事株式会社の巻

フライングぎみかと思わせるような梅雨入り発表後の好天続きの六月十日、事業所訪問の第三四回目としてお邪魔したのは、松戸市の水戸街道（国道六号）沿いに所在する和光商事株式会社でした。

後の取材でもお聞きしましたが、天候と物流とは相当の因果関係（これは物流だけではなく、すべての産業にいえることですが）があり、暑さ寒さの違いで運ぶ物の量が左右されるそうです。無責任なことはいえませんが、せっかく美しい四季のある国に住んでいるのですから、冬は寒く、夏は暑い、そして梅雨には雨がほどほどに降るのがよいと思いません か。

両目入りダルマを背にした相原社長

健保存続のために 抜本的改革を、と力説

目的地に到着し事務所を訪ねると、今回の取材に応じてくださった相原社長が私たちを笑顔で出迎えてくださいました。

相原社長には組合の健康管理事業等推進委員を長くお願いしており、社会保険行政に関してはかなり精通されておられます。この日も取材の冒頭から組合の財政の問題、特に老人保健拠出金の問題や保険料の滞納に関する問題に触れられました。

昨今、やっとマスコミでも取り上げることが多くなったものの、まだまだ拠出金制度や医療費に対するコスト意識等、国民の理解が足りないことを危惧され、国はそれらを啓蒙する責任があるのだともおっしゃいました。

現在のような健保の存続が危ぶまれているときに、先見性をもった抜本的な改革が実現されないかぎり、一時的な改正を繰り返しても根本的解決は見いだせず、当局を本気にさせるためにも、新聞報道されたような拠出金の延納もひとつの手段ではないだろうかと付け加えられました。

そして、保険料の滞納に関しては、厳しい経済状況のなか、誰もが大変な思いをして社会保険料を納付しているのが現状なのに、それを滞納する業者は保険料分を運転資金に流用しており、同業者として「企業なら同じ土俵で勝負してほしい！」と力説され、この話題を締めくくられました。

厳しく的確なご意見をお聞かせいただき、一人でも多くの事業主の方々がこのように深い理解のもと、健保の運営にご協力いただけるよう、私たちも努力しなくてはならないとあらためて実感したところです。

健全経営の勝因は、堅実な配送業務による信頼関係

話題は、社史ならびに同社の事業内容について移行しました。

和光商事株式会社は、昭和四十六年の創業で、当時は荷主である中村屋の千葉・茨城県を主に管轄する配送センターとして設立されたそうです。六人のグループで共同出資して始められ、創業者グループの一人であった先代社長が二代目として経営を引き継ぎ、そのご子息の現社長が昭和五十九年に三代目に就任して今の礎を築いてこられたとのことです。もうすぐ創業三〇年を迎えられるとのことでした。

かつては電気機器の倉庫も手がけようと考えられましたが、中村屋と密接な関係を保ちながら地道に配送業務を受け持ってこられたことが、バブル経済崩壊の影響もさほど受けずに健全経営がなされた勝因のようでした。荷主も誠実な同社には絶大な信頼があり、まさに共存共栄の関係にあるようでした。

運送する品物は、かつては「パン」が中心だったそうですが、今はそのほとんどが「菓子」に変化してきているようです。氏は、これからも厳しい競争に生き残るためには経営戦略を練って、ひとつの物にこだわらず、総合食品メーカーへ移行していくのが食品業界の流れとのことで、この流れに追随していくことが与えられた使命、とおっしゃいました。

規則正しい生活が いちばんの健康管理

次に、会社の福利厚生部門が話題になりました。

従業員の一〇〇％の方々が毎年健康診断を実施されているそうです。検査結果をみて、相原社長自ら社員の方々に再検査などを促しておられるそうですが、「なかなか難しい」とおっしゃられましたので、「検診後のフォローはおまかせください」と保健指導等を提案し、検討をお願いしました。

中村屋の製品を運ぶ和光商事㈱のトラック

関連企業を相手にした野球やソフトボール大会等もかつては開催されたそうですが、高齢化と核家族化によって全体でなにかを実施するのが難しくなってきているようです。現在は年三回、ゴルフコンペを開催し、親睦を図っておられるとのことでした。

最後に、氏の健康の秘けつについてお聞きすると「規則正しい生活」ときっぱりと言い切られました。職業柄、朝の早い生活が続くことから早寝早起きを励行されており、タバコもやめられたとのこと。無意識のうちに自分にいちばん合った健康管理へのシフトが身についていらっしゃるようでした。

こうして、優しい笑顔のなかに厳しさが同居する相原社長の人柄に引き込まれるような今日の取材に終わりを告げることとなりました。

取材中、「個人や会社の将来の夢は」と氏に問いかけたところ、「なにか縁があって知り合えた従業員のみんなを大切にしていきたい」との答えが返ってきました。今日の取材は、この言葉に包括されていたように私たちは感じました。

社長室に飾られていた複数のダルマが目に焼き付いて離れませんでした。事業主と社員が固い絆で結ばれた同社のダルマは毎年片目で終わることはないと確信して、私たちは帰路に着きました。

お忙しいなか、本当にありがとうございました。